

県外派遣審判員報告書

作成日 2017年 6月27日

大会名	第70回全九州高等学校バスケットボール競技大会	会場	福岡市民体育館
期間	2017年6月23日～25日	報告者	川井 剛
スケジュール			
期日	内容		場所
6月23日 18:00～	A級フィットネス		福岡市民体育館
6月24日 8:15～	審判会議		福岡市民体育館
6月24日 15:00～	男子2回戦		福岡市民体育館
6月25日 9:00～	大会二日目		福岡市民体育館

審判会議の内容

○代表者会議での確認

ベンチ…5分前までにサイン、立ち続けていいのは一人だけ、アシスタントコーチは審判に話しかけない、タイムアウトはTOがはっきり分かるように・予約はない・50秒のブザーでベンチを出す、ゲームキャプテンを審判に伝える
プレイヤー…交代はプレイヤーが直接TOに申し出る、シャツが出ていたら審判に促されなくても自分で入れる

試合	2回戦 福岡第一vs長崎西 男子 (副審) 相手 川島 司 氏(宮崎)A級
ミーティング内容	○ゲーム前 ・ゲームを最初から自分たちが主導権を握ってコントロールすること ・そのために、当たり前のことを当たり前に鳴らして、自分たちが苦しくならないように気をつけること。分かりづらいアウトオブバウンズの協力など ・プレスがあった際のお互いの位置と引き渡し ・留学生がいることから、トレイルはゴールテンディング・インターフェアに注意すること ・留学生に対する守り方、両チーム共にガイドラインに乗っ取って、悪いものははじめにしっかりと排除していく ・判定の中身についてはそれぞれが確認して行っていく。プレイのインターバル中などに、お互いの中身を擦り合わせる
	○ゲーム中 ・主審の川島氏が、ゲーム序盤から基準を示すコールを続けて下さったので、自分も同じような場面を感じ取りながら判定することを心がけた。しかし、ゲームの中で、自分が判定したものに對するベンチの反応が気になったり、判定しなかったものに対しても気になったりと、修正をかけられずにモヤモヤしたまま進んでいった場面もあった。プレイを捉えにいて、自信を持って判定したのももちろんあるが、それ以上に、捉え切れていなくて判定できないものも多かったゲームだった。
	○ゲーム後 主任 古後 宏和 氏(福岡)A級 ・判定をもっと、自分から求めにいくこと、判定してほしいものはまだある ・そのために、もっと確認できるいい位置やアングルを求めること ・主審の川島氏が示した基準に乗れていて、いい判定も多かった ・ベンチから何かを言われても自分をぶれさせない。 ・自信を持って判定すること
	○川島氏から ・予測という言葉がよく使われるが、例えば、「ここからのこういうプレーは、こんなファウルやヴァイオレーションが起りやすい」というある意味のパターンがあるから、それらを頭に入れておいて、確認をしていくこと ・点差がややあって、選手も「フワっ」とした時間帯があったが、そこでレフリーも同じようにするわけではなく、交代で入った選手にも新たに基準を示していくことで、ゲームがしまった印象になる
	○原田氏から ・ゲームを通して、分かっているノーコールではなく、判定し切れていなくて鳴らせていないのではないかと感じた ・笛の大きさやプレゼンテーションを、もっと大きく・力強くすることで、何かベンチから言われた際に自信がないように見られなくなる。

全体を通しての感想

今回、九州高校総体に派遣させていただき、大変勉強になりました。多くの上級の方が審判をする姿を見ることや、会話の中から、自分の今後やるべきことがはっきりしました。

また、自分の審判ではないが、福岡氏(長崎県S級)がご自身のレフリーの反省の中で、「このゲームはこのように進めるつもりだった。」「こういう風に終わらせるためにここでこの笛を入れた」というようなことをおっしゃっていた。ゲームの初めから終わりまでの全体を、レフリーがルールを適用しながらコントロールしていたということだと思った。

最後に、このような機会を与えて下さった県審判委員会や、運営等さまざまな場面でお世話を下さった福岡県審判部の方々に感謝申し上げ、第70回全九州高等学校バスケットボール大会の報告といたします。